

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.039; 序文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1575

序 文

崎山理

本書は、平成11年と12年の2年度にわたり、国立民族学博物館の共同研究「消滅の危機に瀕した人類言語の予備的調査研究」(研究代表：崎山 理)で行なった研究会の研究
成果報告である。

本研究の目的は、世界の各地で自然環境の破壊や動植物の種の絶滅をしのぐ速さで人類言語の消滅が進んでいるという事実の認識に基づきながらも、話者数の減少だけでなく子どもが母語として習得しなくなるという、継承の糸が切れかけた言語が急増しているという現実
に言語研究者としていかに対応すべきかを考えようとするものである。そのために、世界のどの地域のどの言語にこのような事態が発生しつつあるのかを分析するとともに、その言語の研究状況を調査し、また言語ごとの問題点を比較検討することによって、今後の消滅の危機に置かれている言語研究への指針づくりをめざすということにあった。一方で、文部科学省の特定領域研究として、やはり同様の研究目的をもった「環太平洋の〈消滅に瀕した言語〉にかんする緊急調査研究」(領域代表：大阪学院大学情報学部教授・宮岡伯人)が平成11年に開始され、平成14年まで3年半の継続研究が行われることになった。しかし、この特定領域研究は、いうまでもなく海外におけるフィールドワークが主要な目的として予算化されていたのに対し、本研究会は、そのようなフィールドワークのために必要な既存の情報やデータの所在(あるいは不所在)の確認、またフィールドワークの方法、発生する問題点を調査研究することを意図していたのである。その意味ではフィールドワークのための「予備的」調査研究であり、また一方で、特定領域研究とは相補い合う共同研究ともなりうる。研究代表としては、二重の目的を果たすことができたと自負している。本共同研究の成果と特定領域研究の成果は、今後、両輪のように学術的な評価を受けるものと期待したい。

本研究では、日本を含む環太平洋地域を大きく六つに分け、実際にフィールドワークに携わっている各地域の代表的研究者から最新の状況を発表、報告、コメントしていただいた。無論、地域全体を網羅するものではないが、これらの地域には、わが国では最先端の研究者がおられるということの意味する。次に、研究会での発表タイトルと発表者を記す。なお、右肩の*は、特別講師として発表をお願いした方がたである。

I オセアニアの現状と問題点(1999年6月12日)

オセアニアにおける危機言語の現状と研究状況 崎山理
東部ポリネシアの場合 柴田紀男

- 元第二言語としての日本語の維持と摩滅の諸相 渋谷勝己*
- II 東アジアの現状と問題点 (1999年9月25日)
- 中国雲南省における彝語方言の使用状況 岩佐一枝*
- 西南中国〈川西走廊〉の諸言語の地域分布 池田巧*
- III 東南アジアの現状と問題点 (2000年3月3日)
- ビルマ地域の消滅の危機に瀕した言語 藪司郎*
- カレン系言語の状況 加藤昌彦
- IV アメリカの現状と問題点 (2000年6月10日)
- 海岸ツィムシアン語の現状と問題点 笹間史子
- 北アメリカの「危機言語」: 現状と課題
- 特に北西海岸セイリッシュ諸語を中心に 渡辺己
- 中米の危機言語の現状と問題点 八杉佳穂
- V 北アジアの現状と問題点 (2000年10月7日)
- 中国のツングース諸語 津曲敏郎*
- ロシアのツングース諸語 風間伸次郎*
- ユカギール語の現状と問題点 遠藤史*
- VI 日本列島の現状と問題点 (2000年12月22日)
- 方言語彙の衰退 佐藤亮一*
- 方言研究の現状と本研究プロジェクト 真田信治
- 琉球語のなかの危機言語 狩俣繁久
- VII 補足および総括, 展望, コメント (2001年3月10日)
- 北スラウェシ州, ミナハサにおける地方語とメナド・マレー語 平林輝雄*
- 八重山方言から東北方言まで
- 日本語の方言形成過程について 上村幸雄*
- コメント 奈良毅・坂本比奈子・永井佳代
呉人恵・峰岸真琴・宮岡伯人

危機的であろうとなかろうと, 言語の調査研究についても, 現在, もっとも配慮しな

ければならないのは、言語をも含む文化の権利また復権という世界的規模での民族問題である。この問題についても、本研究会は、日本言語学会・国立民族学博物館の共催で1999年11月26日、国立民族学博物館で開催された公開シンポジウム「言語・文化における権利」に協力し、合同の研究会とした。発表者に多くの民族学者も含むそのときのプログラムは次のとおりである。ただし、このシンポジウムの記録は、本共同研究の記録とは一線を画する意味で本書には収録していない。なお、この発表のなかには、すでに他で公刊されているものもある。

文化表象の場と権利

- 世界の民族博物館再考 ————— 吉田憲司 (国立民族学博物館)
- 先住民の文化の権利
- カナダ・イヌイトを中心に ————— 岸上伸啓 (国立民族学博物館)
- マヌーシュ語・マヌーシュ文化の復権 ————— 大森康宏 (国立民族学博物館)
- チュクチの言語文化の現状と将来 ————— 呉人徳司 (東京外国語大学)
- 中国青海省・土族語における危機の意味 ————— 庄司博史 (国立民族学博物館)
- 南アジア諸国の言語政策と
- 少数民族の母語に対する権利意識 ————— 奈良毅 (清泉女子大学)

初年度に行なわれた3回の研究会では、オセアニア（ミクロネシアの日本語を含む）、東アジア（中国）、東南アジア（ビルマ）について7名の発表があり、それぞれの地域における現状と問題点が述べられた。オセアニアでは英語やそれにつぐトクピシン語のような優勢言語がますます拡大し、少数言語が危機にさらされていること（崎山報告、柴田報告、渋谷報告）、それに対し、アジア大陸山地では正確な言語名はもとより話者数すら正確に把握されていない言語が多く（藪報告）、また少数民族語を調査すること自体、政治的干渉とみなされかねない危険性があること（加藤報告）など、調査を行なう以前に国内の問題が存在することが指摘された。また、従来の蓄積されたデータ研究という観点からは、中国の川西走廊の言語（池田報告）とツングース諸語（津曲報告）について、本研究会の意図をもっともよく反映した発表があった。

次年度のアメ리카（北米、中南米）、北アジアそして日本列島（琉球列島を含む）地域についての四回の研究会では、北米インディアン諸語における危機言語自体の継承のほかに（笹間報告）、研究そのものの継承の重要性が指摘され（渡辺報告）、また北アジアのツングース諸語では、ロシア語（風間報告）あるいは中国語（津曲報告）へのシフトがとくに若い世代において急速に始まっていることが報告された。日本の現状では、研究層の厚い方言地理学研究を踏まえ、とくに語彙の消長に関する山形県庄内三川町の

重点調査結果の発表があった（佐藤報告）。そして最終回は、補足的な発表に続き（上村報告ほか）、本研究会で取り上げられた発表地域以外でのフィールドワークの研究者からの提言と方法論についての積極的な発言があいついだ。

本報告書の構成は、ほぼ発表順に掲載している。ただし、なかには発表時のタイトルが発表者によって修正されているものもある。本書を編集するにあたり、あらかじめ発表を録音し、テープ起こした原稿に手をいれていただくという方法を採用した。ただし、テープレコーダーの操作ミスから音声不明瞭で起こしができず、2人の発表者には原稿をあらたに書きおろす手間をおかけすることとなったが、ころよくお引き受けくださったのはありがたかった。また早々に原稿校閲をすませてくださった方がたには、刊行まで大変長い間お待たせしたことをお詫びしたい。

最後に、テープ起こしの経費には編者の一般研究費（滋賀県立大学人間文化学部）の一部を使用させていただいたこと、また原稿の整理や書式の統一などの細かな作業には小久保由美子さんのお世話になったことを記し、お礼をもうしあげたい。